

成城大学本『萬葉集註釈』について

——国文学研究資料館本系統の平仮名本——

小林 真由美

一 成城大学本『萬葉集註釈』

鎌倉中期の僧・仙覚は、文永六年（一二六九）に『萬葉集註釈』（十卷）を著した。

仙覚は建仁三年（一一〇三）に生まれ、寛元四年（一二四六）以降、数回にわたって『萬葉集』の校訂を行い、無訓であった一五二首の歌に新点を施した。『萬葉集註釈』は仙覚校訂の文永三年本の後に執筆された。『萬葉集抄』『仙覚抄』などとも称され、内容は、『萬葉集』の総論及び八百首余りの歌の注釈である。『萬葉集』諸本の調査の上に立った実証的研究で、『萬葉集』研究史上の画期であると評価されている。

成城大学が所蔵する『萬葉集註釈』は、江戸時代初期の書写と思われる五冊本で、第二冊を欠く四冊である。

蔵書印や書写奥付がないため、書写者や旧蔵者は不明である。原装で袋綴じ、表紙は茶色のつや出し、押八双がある。縦約二十八・五cm 横約二十二・三cm。料紙は楮紙で、墨付丁数は第一冊九十六丁・第三冊六十丁・第四冊七十三丁・第五冊四十四丁。外題・内題・尾題は表（成城大学本『萬葉集註釈』の構成）（二〇五頁）の通りである。全冊、前後に見返し紙はなく、遊紙が二丁ずつある⁽¹⁾。

字面は縦約二十四cm、横約十九cm。十一行書きで字詰めは一行二十〜二十八字程度。冊ごとの寄り合い書きであるが、第一冊と第五冊は同筆と思われる。朱と青の書き入れがあり、全体に虫損がある。

二 成城大学本『萬葉集註釈』の系統について

『萬葉集註釈』の写本は、国書データベースに二十一本掲載されている（二〇二六年二月現在）。もっとも古い現存写本は、冷泉家時雨亭文庫所蔵の公安八〜十一年（一二八六〜一二八九）書写の零本二帖（巻第一・巻第三）である⁽²⁾。文永六年（一二六九）の『萬葉集註釈』成立から二十年も経たない時期である。次に古い写本は、貞和三年（一三四七）書写の仁和寺蔵本（巻第一欠）である⁽³⁾。

冷泉家時雨亭本及び仁和寺本は漢字片仮名交じり文で書かれているため、『萬葉集註釈』の原本が片仮名による十巻本であったことがうかがわれる。しかし、伝本には片仮名本も平仮名本も存在し、書物の形態も、五冊本・七冊本・十冊本など、一様ではない。

江戸時代には、片仮名交じり文を平仮名にあらためた整版本（無刊記）が刊行された。『萬葉集註釈』十巻を

上下に分かった二十冊本で、宝永年間（一七〇四～一七二二）頃の刊行と考えられている。⁽⁴⁾寛永版『萬葉集』の普及後のことで、国学の高まりに応じて刊行されたものと思われる。ただし本文に問題が多いことが指摘されており、「誤字頗ル多く、殆ンド読過シ難キモノアリ」（『国文注釈全書』第十九卷「緒言」）、「誤字も極めて多い悪本である」（『校本萬葉集』首卷「萬葉集註釈書の研究」）と評されている。

木下正俊は、版本には、片仮名の「コ」を「ユ」と読み間違えて平仮名の「ゆ」と書く、「ラ」を「ヲ」と間違えて「を」と書くなどの、片仮名を平仮名にあらためた際の特有の誤りがあることを指摘している。⁽⁵⁾木下が挙げる例の一部を挙げる。片仮名文が仁和寺本の本文で、カッコ内の平仮名が版本に書かれている文字である。

ユ↓コ

タトテト同内ノユ（コ）エ也（『萬葉集』卷第十、一八八九）

ラ↓を

タハミツラ（を）トハ（卷第十四、三五〇一）

ヲ↓ら

イナヲ（ら）カモ（卷第十四、三三五二）

コ↓ゆ

君ニコ（ゆ）フルニ（卷第十七、三九七二）

成城大学本は版本と同じく平仮名本であるが、「たとと同内の故也」「たはみつらとは」「いなをかも」「きみにこふるに」と書かれ、すべて仁和寺本に一致している。木下がこれらのほかに挙げている版本の誤字や脱落についても、成城大学本が版本に一致する箇所はない。その他にも版本とは相違が多いため、成城大学本は平仮名本であるが、版本を写したものでないことがわかる。

成城大学本『萬葉集註釈』は、現存諸本の中でも、小川靖彦が指摘する、国文学研究資料館本系統の伝本の形態上の特徴に一致している。⁽⁶⁾

- 一、十巻で五冊本仕立てという体裁をとる。
- 二、内題を巻によつては欠く。
- 三、一面十一行で漢字平仮名交じり文で書く。
- 四、見出し歌・語句を高く、注文を低く書く。
- 五、奥書が註釈巻一末の仙覚のもののみである。

これらの特徴を有する写本は、小川によれば、人間文化研究機構国文学研究資料館蔵本（五冊）。以下、資料館本）、龍谷大学学術情報センター大宮図書館蔵本（写字台文庫蔵。四冊、第一冊欠。以下、龍谷大学本）、阪本龍門文庫蔵本（五冊。以下、龍門文庫本）の三本が存在する。また、賀茂別雷神社蔵三手文庫本（刊本）に校合書き入れされた本文が資料館本系統と一致しており、この対校本も加えることができるという。

小川によれば、資料館本（五冊）の本文は、玄覚書写書人本系統の写本で、仁和寺本・冷泉家時雨亭文庫本に近い。室町末から江戸初期の書写で、第二冊は智仁親王の筆によるものである。龍谷大学本も室町末から江戸初期の書写で、第一冊を欠く四冊である。各冊に「寫字臺藏書」の印があり、西本願寺本門主によって収集、伝持された本である。龍門文庫本（五冊）は江戸初期書写、「曼殊院藏」「曼殊圖書之印」「龍門文庫」の印がある。川瀬一馬編『龍門文庫善本書目』⁽⁷⁾によれば寛永頃の書写、日野角坊文庫旧藏である。小川は、「その系統の本が、智仁親王と近い関係にある西本願寺や曼殊院で所藏されていたことから、智仁親王の文化圏内で積極的

に『萬葉集註釈』の書写が行われたことが窺われるのである」と述べている。⁽⁸⁾
 成城大学本は体裁だけではなく、各冊の所収巻も資料館本系統に一致し、本文も非常に近い。次の注文（『萬葉集註釈』第九卷）は、『萬葉集』卷第十八・四〇五五番に詠まれていた地名「五幡の坂」^{いわた}（福井県敦賀市）に付したものである。版本の「越中より」は誤りで、木下は「（版本が）内容が理解できないままにおぼろげな知識で記事を歪曲することさえあった」例として挙げている。

（仁和寺本）

イツハタノサカ越前国越前国へコユルニ二ノ道アリ

（資料館本）

いつはたのさき越前国越前国へこゆるに二の道あり

（叢書本）⁽⁹⁾

イツハタノサカ、越中、越前国へコエルニ、二ノ道アリ

(版本)

いつはたのさか。越中より越前の国へこゆるに。二の道あり。

(『萬葉集』卷第十八・四〇五五番注文、『萬葉集註釈』卷第九)

小川は、資料館本系統の写本は、注文は仁和寺本と一致しているが、ともに見出しを「いつはたのさき」としていることを指摘している。成城大学本の見出しも「いつはたのさき」と書かれ、資料館本系統に一致している。

(成城大学本)

いつはたのさき越前国越前の国へこゆるに二の道あり

もう一例を挙げると、小川は、『萬葉集』卷第十七・三九七二番注の後の注記が、仁和寺本に見られず、資料館本と龍谷大学本に見られるものであることを指摘している。⁽¹⁰⁾成城大学本にも同じ注記が書かれている。ただし、資料館本と龍谷大学本は「注文より約一字程度低く書かれる」とあるが、成城大学本は注文と同じ高さで書かれている。

此哥より末は初の七卷の哥也いかなれば十七卷二被入哉

(『萬葉集』卷第十七・三九七二注後、『萬葉集註釈』卷第九)

そのほかの小川が指摘する箇所についても、成城大学本は資料館系統の本文に一致しているため、成城大学本『萬葉集註釈』は、資料館本系統の一本として分類することができる。

成城大学本『萬葉集註釈』は、資料館本系統の写本の中でも、特に龍門文庫本に近い。成城大学本の四冊とも、墨付一丁目は字詰めが龍門文庫本と同じである(二〇八頁、図1・3参照)。一丁目以降も字詰めがなるべく同じくなるように書写されているため、龍門文庫本と成城大学本は、第一冊・第三冊・第五冊の墨付丁数が同じである。第四冊のみが異なり、成城大学本が墨付七十二丁、龍門文庫本が七十四丁である(二〇七頁〈資料館本系統の墨付丁数〉参照)。

表紙は龍門文庫本の方が成城大学本よりも濃い茶色で、同じく左端に押八双がある。龍門文庫本の外題は「萬葉集註釈 地(水・火・風・空)」。内題や尾題は同じである。寸法は龍門文庫本は縦約三十一・〇cm、横約二十二・三cm。成城大学本より龍門文庫本の方が縦が訳二・五cmセンチほど大きく、横幅はほぼ同じである。字面の高さは龍門文庫本が約二十五cm、成城大学本は約二十四cm。成城大学本の方が上下左右の余白が少ない。

両本の相違として、龍門文庫本の第二冊以下の各冊末にある「一校了」が、成城大学本にはないという点がある。成城大学本の来歴はまったくわからないが、龍門文庫本を直接写したものではないかと推測することは可能であろう。

三 成城大学本の書き入れについて

成城大学本『萬葉集註釈』の書き入れは、大きく分けて三種類が認められる。一つ目は、本文の文字の修正（主に見せ消ち）で、墨や濃い朱で書かれている。二つ目は、全冊に書き込まれた薄い朱による校合書きである（①）。三つ目は、第三冊と第五冊に書かれた紺青の片仮名傍訓である（②）。

① 朱の校合書き

成城大学本の校合書きは、薄い朱書で全冊の全体に見られる。本文の右傍に「〇〇イ」と小さめの文字で書き込まれている。漢字以外は平仮名で書かれているため、平仮名本の『萬葉集註釈』を校合に用いたことが知られる。ほとんどが版本に一致しており、版本または版本の系統の写本であるという見通しを立てることができる。次は前節で、地名「五幡の坂」の注文として挙げた箇所である。見出し歌（巻第十八・四〇五五）と注文の全体を載せる。

（仁和寺本）

カヘルマノミチユカムヒハイツハタノサカニソテフレワレヲシオモハ、

イツハタノサカ越前国越前国ヘコユルニ二ノ道アリイツハタコエハスイツヘイツキノヘコエハツルカノ

津へイツルナリキノヘコエハコトニサカシキミチ也

(成城大学本)

かへるまのみちいゆかんひはいつはたのさかにそてふれわれをしおもは、

いつはたのさき^{(宋)カイ}越前国越前の国へこゆるに二の道ありいつはたこえはすいつ^{(宋)カイ(宋)}へ出きのへこえはつるかの
つへ出るなりきのへこえはことにさかしき道なり

(版本)

かへるまのみちいゆかむひはいつはたのさかに袖ふれわれをしおもは、

いつはたのさか^{(宋)カイ}越中^{(宋)カイ}より越前の国へこゆるに二の道ありいつはたこえは海津^{(宋)カイ}へいづ。きのめ^{(宋)カイ}こえはつ
るがの津へ出る也。きのめ^{(宋)カイ}こえはことにさがしき道なり

仁和寺本・版本の傍線部は、成城大学本に朱の校合書きがある箇所である。二か所目の傍線部は、仁和寺本ほか諸本には「スイツ」「すいつ」とあり、版本のみが「海津^{(宋)カイ}」とある。前掲のように、木下正俊が「(版本が)内容が理解できないままにおぼろげな知識で記事を歪曲することさえあったのでないかと思われるふしがある」と述べ、その一例として次のように指摘している箇所である。

仁和寺本の「イツハタノサカ越前国」というのは「五幡の坂、越前国に在り」ということで、その坂は敦賀市内の五幡からその東木の芽峠を隔てた帰^{(宋)カイ}(可敞流)に通ずる道にある。(中略)「スイツ」は杉津、五幡

の北にあって敦賀湾に面している。版本がこれを七里半越の近江側の起点海津（琵琶湖西北部）と曲解し、かつ「越中より越前へこゆるに…」としたのは納得し難いことである⁽¹⁾。

つまり、『萬葉集註釈』諸本には、越前国へ超える道は二つあり、「五幡越えは杉津すづつに出づ。きのへ越えは敦賀の津に出づるなり」と書かれている。杉津は福井県敦賀市にある地名、「きのへ」（木の芽峠。「木辺」とも表記される）は敦賀市と今庄町を隔てる峠で、実際の地理に即した説明である。しかし、版本は、木下が述べるように「すいづ（杉津）（越前国）を「かいづ（海津）」（近江国）に「曲解」し、しかも「越中より越前へこゆる」道にしてしまったのである。

この部分における成城大学の朱字校合書きは四か所あり、すべて版本に一致している。

（成城大学本）

「いつはたのさき」^{（朱）}

「すいづへ」^{（朱）}

「きのへへこえは」^{（朱）}

（版本）

「いつはたのさか」

「海津へ」^{（朱）}

「きのめこえは」

このように版本が独自に「歪曲」したとされる箇所についても、成城大学の校合書きは版本に合致している。成城大学本が校合に用いたのは、おそらく、版本または版本の系統の写本であったと思われる。

② 紺青の片仮名傍訓

成城大学本『萬葉集註釈』第三冊（巻第五・六）と第五冊（巻第十）の一部の見出し歌に、片仮名の傍訓と返り点が紺青で書き入れられている。『萬葉集』の巻数では巻第八（十七首）、巻第九（十三首）、巻第十九（三首）の計三十一首である。歌番号は二〇七頁の表（成城大学本『萬葉集註釈』の紺青の書き入れ（片仮名傍訓）の通りである。

時雨亭本・仁和寺本や国文学資料館本系統の写本には一部分を除いて原則的に傍訓は振られておらず、成城大学本に紺青訓が振られている三十一首の歌は、原文の漢字表記のままである。逆に、叢書本や版本は原則的に総訓で、紺青訓の歌にも訓が振られている。しかし、成城大学本の紺青訓と相違する部分が見られる。

（叢書本）

ヒルハサキヨルハコヒズルネフリノキキミノミムヤワケサヘニミヨ
昼者咲夜者恋宿合歎木花君耳将見哉和木佐倍尔見代

（版本）

ひるはさきよるはこひぬるねふりのききみのみむやわけさへにみよ
昼者咲夜者恋宿合歎木花君耳将見哉和木佐倍尔見代

（成城大学本）

ヒルハサキヨルハコヒズルネフリノハナキミノミムヤワケサヘニミヨ
昼者咲夜者恋宿合歎木花君耳将見哉和木佐倍尔見代

（巻第八、一四六一）

傍線部「合歛木花」に、叢書本・版本には「ネフリノキ」と訓が書かれているが、成城大学本には「ネフノハナ」と書かれている。注文に、

此哥古点にはひるはさきよるはこひぬるねふりの木君のみみむやわけさへにみよと点せり漢字は合歛木花なりねふりの木と点すれば、花の字和せられず

(成城大学本『萬葉集註釈』巻第五)

とあり、古点に「ねふりのき」とあったこと、しかしそれでは「合歛木花」の「花」を訓んでいないと書かれている。すると、歌の訓が叢書本・版本のように「ネフリノキ」では、注文の述べるところと食い違うことになる。『註釈』ではなく、『萬葉集』の訓を見ると、非仙覚本の『類聚古集』や紀州本が「ネフリノキ」。活字附訓本や寛永版本などの仙覚新点本は「ネフノハナ」である。¹²⁾成城大学本の一四六一番の紺青訓は、新点本系『萬葉集』に拠って書き入れたという推測を立てることができる。

そのほかの歌も、成城大学本の紺青訓はほとんどが活字附訓本や寛永版本『萬葉集』と一致している。但し、一部仮名遣いに異同がある。「梅」(『萬葉集』巻第八・一四二三)を成城大学本『萬葉集註釈』では「ムメ」とし、寛永版本『萬葉集』では「ウメ」と書いている点と、文末にある助動詞「む」を成城大学本『萬葉集』では「ン」と書き、寛永版本『萬葉集』では「ム」としているという点である。『校本萬葉集』によれば「ン」と書い

ている本はない。また、返り点が書き込まれていることから、書き入れのある活字附訓本や版本を用いた可能性も考えられよう。

四 結 び

以上のように、成城大学本『萬葉集註釈』は国文学研究資料館本系統の写本であり、この系統の写本は国文学研究資料館本・龍谷大学本・阪本龍門文庫本・成城大学本の四本となる。特に、龍門文庫本と成城大学本はよく似ており、非常に近い関係にあることが推測される。

すべて室町末期から江戸初期の書写で、国文学研究資料館本の第二冊は、細川幽齋から古今伝授を受けた智仁親王の書写である。成城大学本の旧蔵者は不明であるが、親本の可能性がある阪本龍門文庫本は、智仁親王と関わりの深い曼殊院の旧蔵本である。小川が指摘するように、⁽¹³⁾智仁親王の周辺の文化圏において、仙覚『萬葉集註釈』の書写が重ねられていたのである。『萬葉集』受容史において、注目に値することであろう。

成城大学本『萬葉集註釈』は、おそらく江戸初期の書写である。朱字の校合書はおそらく宝永頃に出版された版本の『萬葉集註釈』によるもので、紺青の訓は、寛永版や宝永版の『萬葉集』によるものである可能性がある。市井に版本が行き渡る時代になっても、成城大学本『萬葉集註釈』は手に取って読まれていたのである。堂上に由緒を持つ写本として尊重され、受け継がれていったものとうかがわれる。

注

- (1) 成城大学本『萬葉集註釈』巻第一遊紙一丁表右端に、「ち、れ莫きくに露ふくませて咲て／うれしき朝のこの湯あかり／朝のうれしきゆあかりの茶」と書き込みがある。
- (2) 影印が『冷泉家時雨亭叢書 第三十九巻 金沢文庫本万葉集巻第十八 中世万葉学』（朝日新聞社、一九九四年）に掲載されている。
- (3) 影印が『仁和寺藏萬葉集註釈』（京都大学国語国文学資料叢書別刊巻二、臨川書店、一九八一年）に掲載されている。
- (4) 『国文註釈全書』第十九巻「緒言」（国学院大学出版部、一九一〇年）による。
- (5) 注(3) 木下正俊「解説」。
- (6) 小川靖彦『万葉学史の研究』第三部第二章（おうふう、二〇〇七年）。
- (7) 川瀬一馬編『龍門文庫善本書目 其の一 古写本の部（一）』（阪本龍門文庫阪本千代発行、一九七八年）
- (8) 注(6) 参照。
- (9) 佐佐木信綱編『萬葉集叢書第八輯 仙覚全集』（古今書院、一九二四年。複製版、臨川書店、一九七二年）。竹柏園本を底本とし、神宮文庫本と彰考館文庫本を参考校本として校訂を加えている。
- (10) 注(6) 参照。この注記には「此の哥より末は初の七巻の哥なり」とあるが、次の歌以降も『萬葉集』巻第十七所収歌である。小川は、「不番である」とし、「資料館本と龍谷大学本の親本の書写者による注記と思われる。あるいは錯簡のある『萬葉集』を書写者が参照したことによるものか（なお『萬葉集』の現存する写本では、このあたりに錯簡はない）」と述べている。
- (11) 注(5) 参照。

〈成城大学本『萬葉集註釈』の構成〉			
冊	外題（墨付丁数）	内題・尾題等	奥書
1	萬葉集註釈 一 (96丁)	萬葉集註釈 萬葉集第一卷 (10丁裏) 萬葉集註釈卷第二 第二卷 (61丁裏)	(註釈卷第一末) 〔本云文永六年二月廿四日記之畢 仙覚在判〕 (61丁表)
2	欠		
3	萬葉集註釈 三 (60丁)	萬葉集註釈卷第五 第七卷	なし (1丁表)

- (12) 『校本萬葉集』によれば、西本願寺本・細井本・温故堂本・京大本・春日本・活字附訓本・寛永版本が「ネフノキ」。西本願寺本はもと青、京大本は青で、その右に緒で「カウカノキ」、漢字の左に緒で「ネフリノキ」。大矢本青で「子フハナ」。
- 『類聚古集』・神田本（紀州本）・秘府本『萬葉集抄』・廣瀬本が「ネフリノキ」。
- (13) 注(6) 参照。

※阪本龍門文庫において『萬葉集註釈』（五冊）を閲覽させていただいた。厚く御礼を申し上げます。
※本稿は、二〇二四年度成城大学研究助成「古代和歌集注釈の研究」の研究成果報告である。

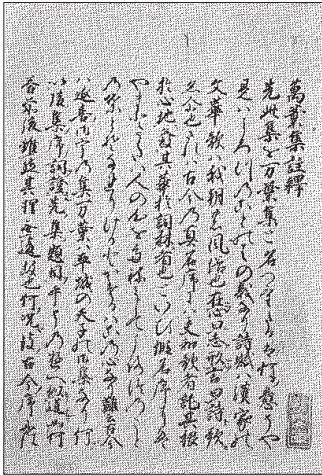
	4	5
	萬葉集註積 四 (73丁)	萬葉集註積 五 (44丁)
<p>第八卷 (25丁表)</p> <p>第九卷 (32丁表)</p> <p>第十卷 (43丁裏)</p> <p>萬葉集註積卷第七</p>	<p>第十一卷 (1丁表)</p> <p>第^十十二卷 (23丁裏)</p> <p>第十三卷 (27丁表)</p> <p>第十四卷 (33丁表)</p> <p>第十五卷 (72丁表)</p> <p>萬葉集註積卷第九</p>	<p>第十六卷 (1丁表)</p> <p>第十七卷 (8丁裏)</p> <p>萬葉集註積第十</p> <p>第十八卷 (16丁表)</p> <p>第十九卷 (23丁裏)</p> <p>第廿卷 (28丁表)</p> <p>萬葉集註積第十 (44丁裏、尾題)</p>
	なし	なし

〈国文学研究資料館本系統写本の墨付丁数〉

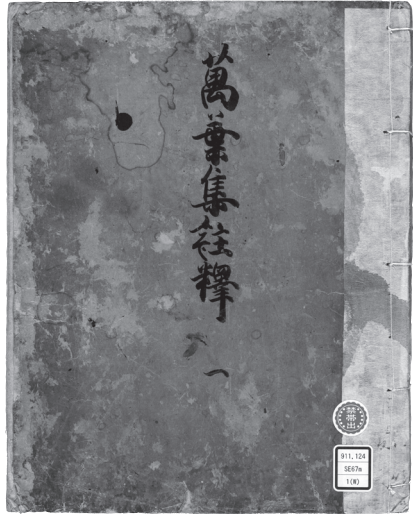
	第一冊	第二冊	第三冊	第四冊	第五冊
資料館本	九十六丁	七十三丁	五十九丁	七十三丁	四十六丁
龍谷大学本	欠	七十四丁	五十八丁	六十七丁	四十四丁
龍門文庫本	九十六丁	七十三丁	六十丁	七十四丁	四十四丁
成城大学本	九十六丁	欠	六十丁	七十三丁	四十四丁

〈成城大学本『萬葉集註釈』の紺青の書き入れ（片仮名傍訓）〉

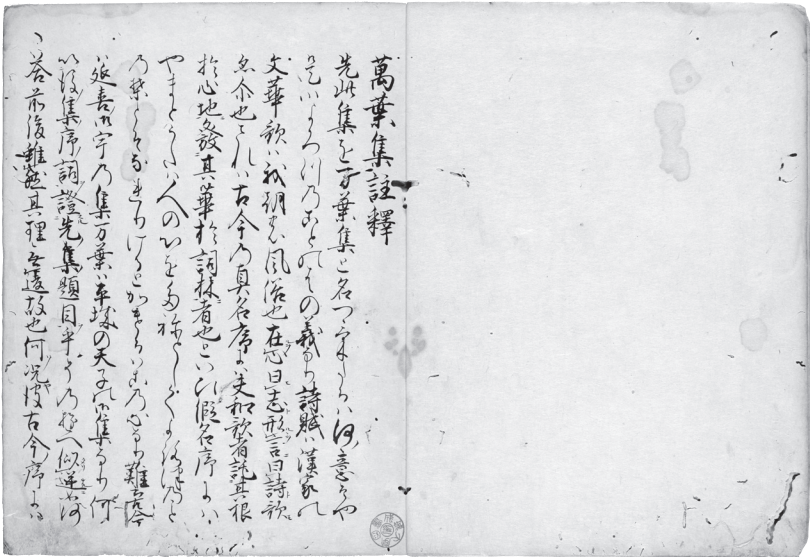
『註釈』	『萬葉集』	『国歌大観』歌番号
第三冊	卷第八	一四一八・一四二三・一四四八・一四六一・一五〇七・一五一二・一五二〇・一五二二・一五三二・一五四四・一五四八・一五七六・一五八九・一五九五・一六〇〇・一六三六・一六三九
	卷第九	一六六九・一六九四・一六九六・一七〇〇・一七〇四・一七〇八・一七一七・一七三八・一七四二・一七四五・一七五三・一七五九・一七六一
第五冊	卷第十九	四一五五・四一五九・四一六四



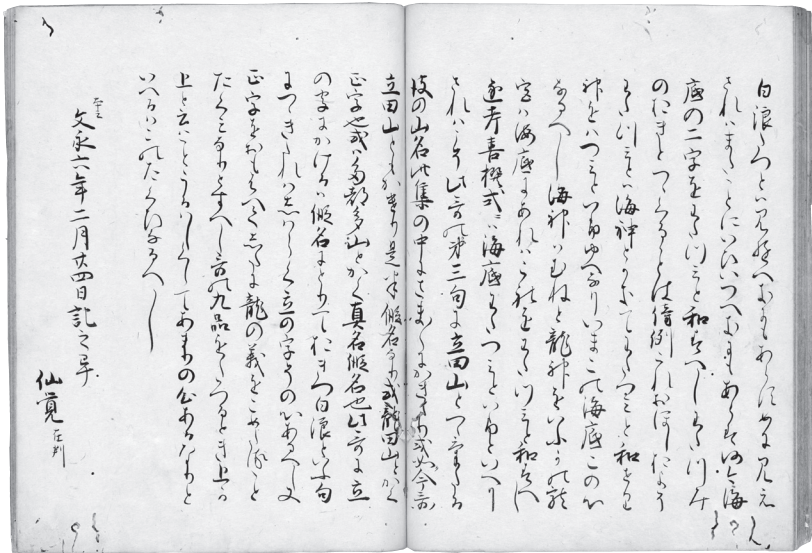
(图1) 阪本龍門文庫本『萬葉集註釈』
 (「龍門文庫善本書目」より)



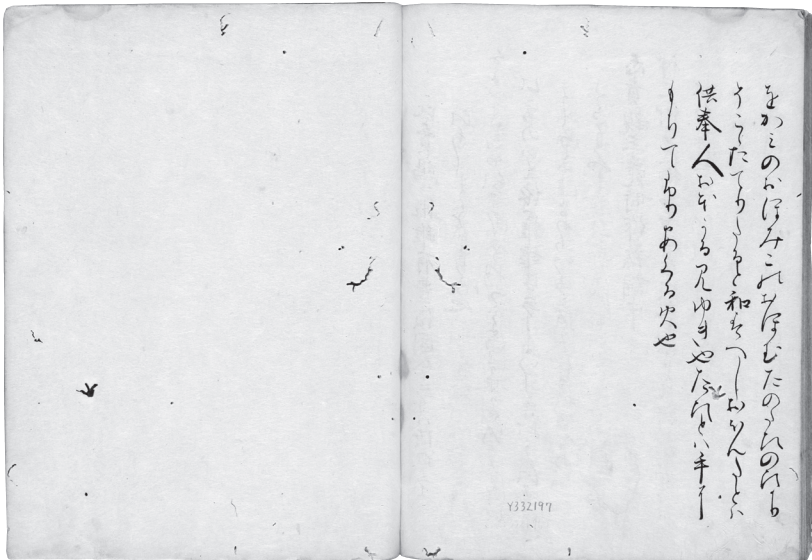
(图2) 成城大学本『萬葉集註釈』第一
 冊表紙



(图3) 成城大学本『萬葉集註釈』第一冊、卷第一 (前遊紙2丁裏・墨付1丁表)



(図4) 成城大学本『萬葉集註釈』第一冊、卷第一末（墨付60丁裏・61丁表）



(図5) 成城大学本『萬葉集註釈』第一冊、卷第二末（墨付96丁裏、後遊紙1丁表）